

多文化関係学会ニュースレター

第13号 2008年6月



<http://www.js-mr.org/>

目次 ————— CONTENTS

2008年(第7回)年次大会について	
大会委員長からの挨拶	2
大会発表応募要項	3
大会概要(プログラム予定)	4
「私の提言」特別企画 久米元会長インタビュー	5
地区研究会報告	関東— 7 関西— 9 九州—10
地区研究会案内	11
書評『サムライ異文化交渉史』	13
2007年度第3回理事会議事録	14
事務局より	15
お知らせ 学会情報	16
編集部より	16

2008年度年次大会について
【開催日】10月18日(土)および19日(日)
【会場】明星大学 日野キャンパス

大会テーマ：

多文化関係学の構築をめざして

ミクロとマクロからグローバル社会を考える



ただ今研究発表を募集中です。ふるってご応募下さい。

(応募要項はp.3をご参照下さい)

締め切りは 7月25日(金)です。

大会委員長挨拶

多文化関係学会 第7回年次大会へのご招待

John E. Ingulsrud (明星大学)

多文化関係学会 (JSMR: Japan Society for Multicultural Relations) の第7回年次大会は、来る10月18日(土)、19日(日)に明星大学日野キャンパスで開催されます。大会前日の17日(金)には、プレ・カンファレンス・ワークショップも行われます。

本大会では、「多文化関係学の構築をめざして - ミクロとマクロからグローバル社会を考える - 」というテーマの基に、本学会の3つの柱(文化性、超領域性、関係性)を軸に、いかに関連他学会とは異なる個性を出しつつ、どう多文化関係学を構築していくかを、議論することをねらいとしています。理想的なレベルにとどまらず、今日における現実社会での課題を積極的に取り上げます。また、多文化の関係性において、言語の役割は当然のことでありながら、あまり直接的に取り上げられていませんでした。今回の大会においては、多言語の使用とその習得への負担、又は投資についても、複数の側面から取り上げた研究発表を期待しています。会員一人一人の日頃の研究成果を発表していただき、互いの意見交換の場として、さらに、今後の研究の進展への展望を分かち合う場となることを深く望んでおります。今回は、通常の研究発表に加え、初めてポスターセッションも試んでいます。

大会第1日目には、招聘講演として、言語と文化の関係性、とくに通訳・翻訳における様々な問題を研究してこられた鳥飼玖美子先生に、多文化時代における言葉とコミュニケーションのテーマで、多文化社会における言語使用を新たな視点を取り入れてお話いただく予定です。また、パネルディスカッションでは「日系ブラジル人との共生を探る」というテーマとなっています。ブラジル移民100周年にあたり、その子孫が我々と共に暮らし、彼らの経験と意味を捉える視点から日本社会の多文化共生への言語等の政策的課題や現場の多面的課題について社会学・人類学・心理学見地から多角的に議論を深めます。

第2日目には、今回初めての企画としてランチョンセミナーがあります。「多文化共生」に対して新しい「トランスカルチュラルリティ」という視点から多文化関係学について何が語れるかを、多文化社会ドイツの展望もふくめお話し頂きます。午後からのオープンフォーラムでは、多文化関係学の可能性を考えるというテーマで、学会創立当時の会員と若手の会員とともに学会の基本的な理念を語り合い、理解を深める機会にしたいと思います。

大会前日のプレ・カンファレンス・ワークショップでは、昨今注目されている研究法であるテキストマイニングを取り上げます。テキストマイニングとは、大量のテキストデータ(文書資料、面接調査データ、フィールドノーツ、電子メール・電子掲示板のログなど)の中に隠れている関係性やパターンを可視化することで、重要な情報を発見するための分析手法です。ここでは、テキストマイニングの技術動向やツールについて紹介するとともに、それらの有用性と限界について議論し、実際にコンピューター実習も兼ねてテキストマイニング・ツールを体験していただく予定です。

開催校の明星大学は、東京の多摩地区に位置し緑と森に囲まれた閑静な場所にあります。皆様には、この機会にぜひ地区のさまざまな顔に触れていただきたいと望んでいます。見どころとして、大学のすぐ近くに 50 周年を迎える多摩動物公園があり、また、高度成長期の期待にあふれた多摩センターの街並があります。その奥には、大衆文化でおなじみのサンリオピューロランドがあります。楽しいひと時をお過ごしただけだと思いますので、ぜひお立ち寄り下さい。多くの方々のご参加を楽しみにお待ちしております。

2008 年度年次大会・発表応募要項

1. 発表テーマ: 本学会の趣旨に沿ったもので、未発表のものに限ります。
2. 発表時間: 30 分 (発表 20 分、質疑応答 10 分)
3. 申し込み締め切り: 2008 年 7 月 25 日 (金)

応募要領

多文化関係学会のホームページ (<http://www.js-mr.org/>) の大会募集要項のページで、以下の事項を入力して受付。

別途 A4 サイズ用紙一枚で、発表概要 (400 字 ~ 600 字) を添付ファイルとして電子メールにて大会委員会宛に送付 8 月 5 日までに採択結果が届かない場合は、大会委員会まで、メールまたは電話でお問い合わせ下さい。

連絡先

第 7 回多文化関係学会大会委員会

e-mail: jsmr2008taikai@ml.rikkyo.ac.jp

電話: 042-591-7227 (明星大学 John E. Ingulsrud 研究室)

学会ホームページでの受付について なるべく 6 月中にお申し込み下さい。

(1) 必要個人情報: 氏名・所属・電子メールアドレス (e-mail をお持ちでない方は電話)

(2) 発表枠を下記の 3 つから選択して下さい。

1. 口頭発表
2. 口頭発表 (石井奨励賞: 学生のみ)
3. ポスターセッション

ポスターセッションは、2 日目昼休みに専用時間を設定していますが、ポスター自体はご希望により 2 日間を通して掲示いたします。

(3) 発表タイトル (できるだけサブタイトルも入れる)

(4) 本学会の関連主要研究領域 (社会・心理・言語・コミュニケーション・地域間研究) から 1 領域を選択して下さい。

電子メールで大会委員会宛に添付で送付 締切: 7 月 25 日 (金)

(5)-1 口頭発表およびポスターセッション希望者

- ・ 発表概要 (400 字 ~ 600 字) を添付ファイルとしてお送り下さい。

(5)-2 石井奨励賞希望者

- ・ 申請書 (多文化関係学会ホームページからダウンロード) を添付ファイルとしてお送り下さい (発表概要は、申請書に組み込まれていますので、別途発表概要を提出する必要はありません)。

2008 年度年次大会・発表応募要項

4. 採択決定通知: 発表内容を大会委員会で審議し、お申込者全員に 8 月 5 日ごろまでに電子メールにてご連絡いたします。8 月 5 日までに採択結果が届かない場合は、大会委員会まで、メールまたは電話(詳細は前記)でお問い合わせ下さい。
5. 抄録の提出: 口頭発表・ポスターセッション予定者は 9 月 5 日までに発表内容の抄録を提出していただきます。なお、製本の都合上、A4 サイズ用紙 2 枚または 4 枚のいずれかにまとめてください。抄録提出方法に関する詳細は、学会ホームページ (<http://www.js-mr.org/>) にて掲載いたします。

2008 年度 年次大会・概要

【大会テーマ】

多文化関係学の構築をめざして

ミクロとマクロからグローバル社会を考える

10 月 17 日(金)大会前日

プレ・カンファレンス・ワークショップ(先着 28 名様予定)・・・ 13:00~ 17:00(予定)

セッション 1: テキストマイニングを用いた社会文化研究

講師: 稲葉光行氏(立命館大学)

セッション 2: テキストマイニング・ツールの実践

講師: 河野康成氏(立教大学リーダーシップ研究所)、小木しのぶ氏(株式会社数理システム)

10 月 18 日(土)大会初日

研究発表 1・・・ 10:00 ~ 11:05

研究発表 2・・・ 11:20 ~ 12:25

総会・・・ 13:30 ~ 14:00

基調講演: 演題:「多文化時代における言葉とコミュニケーション(仮題)」14:00 ~ 15:30

講演者: 鳥飼玖美子氏(立教大学大学院)

パネルディスカッション テーマ:「日系ブラジル人との共生を探る」・・・ 15:45 ~ 17:45

モデレーター: 吉富志津代氏(NPO 法人多言語センターFACIL)

パネリスト: 坂中英徳氏(外国人政策研究所)、田中ネリ(四谷ゆいクリニック)

イシカワ エウニセ アケミ氏(静岡文化芸術大学)、森田京子氏(青山学院大学)

懇親会・・・ 18:00 ~ 20:00

10 月 19 日(日)大会二日目

研究発表 3・・・ 9:30 ~ 10:35

研究発表 4・・・ 10:50 ~ 11:55

ランチョンセミナー「トランスカルチュラルリティと多文化関係学(仮題)」12:00 ~ 12:45

講演者: 前みち子氏(デュッセルドルフ大学東アジア研究所)

ポスターセッション・・・ 12:45 ~ 13:30

オープンフォーラム テーマ:「多文化関係学の可能性を考える(仮)」・・・ 13:30 ~ 15:30

司会: 灘光洋子氏(成蹊大学) ファシリテーター: 手塚千鶴子氏(慶應義塾大学)

パネリスト: 現在会員に交渉中

会場

明星大学日野キャンパス (<http://www.meisei-u.ac.jp/access/hinomap/>)

(1) JR 新宿駅→(特別快速で 26 分)→JR 立川駅→(徒歩 3 分)→立川南駅→(16 分)

→中央大学・明星大学駅

- (2) 京王新宿駅→(急行・橋本行で 42 分)→小田急・京王多摩センター駅→(徒歩 3 分)
→多摩センター駅→(5 分)→中央大学・明星大学駅

参加手順

1. 多文化関係学会のホームページ (<http://www.js-mr.org/>) にて参加登録をして下さい。
2. 参加費事前振込み、もしくは当日払い

参加費 (プレ・カンファレンスは事前払いのみとなります)

プレ・カンファレンス (正会員)	2,000 円	プレ・カンファレンス (非会員)	3,000 円
プレ・カンファレンス (学生会員)	1,000 円	プレ・カンファレンス (非会員学生)	1,500 円
大会参加費 (会員)	事前払い 2,500 円	当日払い	3,500 円
大会参加費 (学生会員)	事前払い 1,000 円	当日払い	2,000 円
大会参加費 (非会員)	事前払い 3,500 円	当日払い	4,000 円 (当日が 4,500 円になる場合有)
大会参加費 (非会員学生)	事前払い 2,000 円	当日払い	2,500 円 (当日が 3,000 円になる場合有)
懇親会費 (一般)	事前払い 4,000 円	当日払い	5,000 円 (非会員が変更になる場合有)
懇親会費 (学生)	事前払い 2,000 円	当日払い	3,000 円 (非会員が変更になる場合有)

注: 事前払いに関して、一旦納入された費用については、いかなる理由がある場合でも返金できません。振り込み手数料については、参加者ご自身がご負担下さい。事前払いにお申込みいただいた場合でも、期日 (9 月 19 日金) までにお振込みが完了していない場合は当日払いとなります。プレ・カンファレンスは、期日 (9 月 19 日金) までにお振込みされなかった場合はキャンセル扱いとなります。

一般1500円、学生1000円

懇親会費：一般会員4000円、学生会員2000円

大会詳細・入会申し込みは学会ホームページへ：<http://www.js-mr.org/>

「私の提言」 特別企画 久米昭元会長インタビュー

聞き手 伊藤明美 (NL 編集委員)

今年で設立から早や 7 年目を迎えようとする多文化関係学会。学会の設立にも深くかわかり、昨年会長に選出された久米昭元さんに 2008 年 3 月 31 日に札幌でお会いして、学会への思い、期待などをうかがいました。時にユーモアを交えながらなごやかに話された学会設立の経緯、運営のご苦労など、お話の内容は大変興味深く、3 時間があっという間に過ぎてしまいました。



伊藤： 先生は、設立の中心的メンバーの一人でした。まずは、新しい会員のためにも多文化関係学会設立の趣旨・経緯などについてお話を頂けますか。

久米： 世界の各地域では、歴史観、宗教、人種、エスニシティ、言語、ジェンダーなど社会を構成する人々の広い意味での文化的相違のために思わぬ軋轢・摩擦・衝突が生じています。また、日本でも多様な文化的背景を持つ人々が生きる「多文化社会」へと急速に変貌しつつありますが、「多文化共生社会」となるためにはいぜん数多くの問題点や課題が山積しています。そこで、これらの諸問題の背景にある諸要因を研究し、教育や実践に活かすための新しい学問的アプローチが必要と考えました。既存学会の権威主義や学問のための学問のような活動に必ずしも満足でき

「私の提言」 特別企画 久米昭元会長インタビュー

ない人々が集まって新しいパラダイムとしての多文化関係研究をやってみようということになったのです。

伊藤： 具体的に「多文化関係研究」とはどのような研究と考えたら良いでしょう。

久米： 個人レベルから組織・社会・国家・国際レベルに至るまでの諸問題を、文化的存在である人間を中心とした関係性に焦点を当てて研究することです。より具体的には、日本という社会を異文化・多文化という視点から問い直していく作業と、日本と他の国々、地域、民族などとの関係性を考えることが柱となります。海外研究者との連携を視野に入れつつ、地球社会の諸問題を多文化性、関係性、超領域性という三つの視点からアプローチすると言えます。また、本学会では、このようなアプローチに関心のある研究者と実践者間の交流の機会を増やし、学問的に新しい展開を目指すことはもちろん、現実の諸課題や政策面での提言などシンクタンク的な役割も目指しています。

伊藤： 学会のメンバーにはどのような専門領域の研究者や実践者がいますか。

久米： 多文化関係研究は、これまでの学問領域を横断的に切り開くもので、国際関係論、異文化コミュニケーション論、異文化理解教育、多文化社会論、社会心理学、言語政策・教育、通訳翻訳論、地域研究、文化人類学、異文化交流・交渉論、異文化ビジネス、環境教育など異文化・多文化との関わりで日本社会を考える多彩な研究者が参加しています。

伊藤： 横断的であるということは、研究方法などに一貫性がないなど、時に混乱も生じると思いますが、その点についてはいかがですか。

久米： 様々な領域における各研究者が、それぞれの方法で研究することで構わないと思っています。むしろ、既存の領域からはみ出したものにスポットをあてながら、異なる方法によって見いだされる研究成果を「つないでいく」ことが重要なのかもしれません。たとえば、会員の中には捕鯨問題や文化遺産の問題に取り組んでいる研究者がいます。これらの問題はどうしても既存の領域を横断的に研究せざるをえません。研究方法は量的と質的と分けただけでも多様な方法がありますが、重要なことは、かけがえのない地球社会で人々が持続可能で平和な世界を築くために必要な研究を妥当性のレベルを高めながらマクロとミクロの両視点で行うことが大切ではないでしょうか。

伊藤： 会長として二年目を迎えられましたが、学会運営に対する抱負をお聞かせ下さい。

久米： 第一にあげたいのは、地区研究会の活性化です。本学会では、研究会での発表を「話題提供」と呼んでいますが、これは、集まった研究者が気軽に意見をぶつけ合える機会を提供したいという思いが反映されたものです。例えば、関東地区の会員が九州地区の研究会で発表するなど、日本のあちこちで研究者たちが交流できる機会を増やしていきたいと思っています。ゆっくりと時間をとって語り合える宿泊型セミナーのような研究会や海外で現地の研究者と意見交換できるセミナーなども開催できたら良いですね。

第二は、学会員の研究成果を社会に還元することです。現在、学会では本の出版を考えていますが、多文化関係を軸にしつつ幅広い領域をカバーできる本学会は、視点の異なる様々なカテゴリーの中での研究のまとまりが期待できるため、学会として本を出版するという企画はぜひ成功させたいと思いますし、継続的に行うべきと考えます。

また、若手の研究者を育てることも大事です。研究方法や地域間研究(例：日中、日韓関係)などのワークショップを増やし、大学院生を中心とした会員諸氏に提供したいものです。こうした取り組みを積み重ねていくことで、多文化関係学により適した方法論というものが見つかるかもしれません。また、ニュースレターでも幾度か取り上げましたが、本学会の「ホラロジーの会」は、若手研究者の研究奨励と学会活動への関心を喚起しようと、本学会初代会長の石井米雄先生が提案されたもので、地区研究会のプログラムにも取り入れることができると思います。

伊藤： よくわかりました。長時間にわたりありがとうございました。

地区研究会報告



関東地区研究会

日時 2008年3月15日(土)

場所 青山学院大学

テーマ 縦横に語ろう 多文化関係学を考える (講演・ホラロジーの会)

話題提供者 石井米雄氏(人間文化研究機構長、京都大学名誉教授、文化功労者)

講演報告

誰よりも東南アジアを理解する石井先生だからこそ聞ける興味深い話が満載であった。また、話題もタイに限らず、日本国内で騒がれている朝青龍問題や柔道の国際化にもおよび白熱した議論が展開された。

先生は、昭和17年青山中学部へ入学したが、その頃はライダーに興味をもつ活発な少年だったと言う。その後、栃木や山形県酒田へ疎開されたが、その経験自体が最初の異文化体験であった。ラジオに興味を持ち、絵の出るラジオ、つまりテレビの研究のため浜松工専、早稲田でその開発に没頭する一方、ドイツ語への関心から言語学への興味が高まり、早稲田大学でソシユールを研究するようになったそうである。その後、昭和28年には東京外国語大に入学、そしてタイへと渡り研究を重ねられた後に京都大学から助教授として職のオファーがあった。その後は、東南アジア史の第一人者として活躍され、紫綬褒章、文化功労賞受賞も受章されている。学位論文は宗教社会学で執筆された。

現在、確立された学問は数多くあるものの、それらの枠組みから漏れているものもある。多文化関係学はその一つと考えられるが、まだ方法論が確立されていない。故にこれから作る必要があり、また、広がりもあるだろう。先生は研究者として自分の対象から離れないことが大切と力説された。ご自身もこれまで様々な研究をされてきたが、タイから離れたことは一度もないと言われる。

学問に対する態度としては、「～通」と「～研究者」は違うと言う。先生によると、事実から本質を見極めること、そしてその方法が大切なのである。これが Discipline である。例えるならプリズムであり、目に見えない光を見るためには道具であるプリズムが必要なのである。つまり



これがあって初めて現象が見える。Method の語源は meta (~の後) hodos (道)。道を辿っていくと着く。日本は手段 (道具) を知っているだけで満足している感がある。道具は必要だが対象によって道具を変えないといけない。

カンボジアでは「1年に3度収穫がある」と言われるが、自然学者は「それは同じ田で獲れるのか?」と聞く。なぜなら同じ田か別の田かで、全く違う分析になるからである。文献学で分かる知識には限界があり、Hayakawa が言うには「地図と現地は往復しなければならない。」特に現地の言葉 フィールドワーク 学際的事であること、が必要である。

多文化関係学会では言語についてまず考える必要があるとのことだった。翻訳論について、日本では限りなく元の言語に近いものにしようとする伝統がある。分かるような日本語にすることが翻訳であり、日本語に表現しなおすことが重要である。ソシュールは「一つの単語には複数の連想の束がある」と言う。たとえば、日本語において I は、私、俺、僕、おいら等、幾通りも表現がある。またゲーテによれば「言葉は一つの世界」だ。相手に押し付けようとせず多文化がどう関係しているかを見極めることが重要であり、それがこの学会に対する最も大きな期待だと言われた。

文責：野中昭彦（関東学院大学人間環境学部）

ホラロジーの会報告

今回のホラロジーの会では、冒頭に石井先生からホラロジーの会の由来とエッセンスについて説明していただいた。石井先生のご説明によると、ホラロジーの会の始まりは、石井先生が京都大学時代に関西地区の院生を中心に非公式な研究発表の場として、そして知的ホラを含む自由な意見交換の場として始まった会であるという。この非公式な研究発表の会では、(1) 笑いを提供すること、(2) Defensive にならないこと、という2つの条件があり、目的は知的にしかしホラを吹くように自由に議論を交わし、そのような議論の中からそれぞれが何か新しい発見をすることが重要であったという。

また多文化関係学の構築に関しても、多文化間の「関係」に注目することが重要で、研究者は物知りで終わってしまうのではなく、さまざまな事象の本質を見極めることが大切だと述べられた。そしてフィールドを行う時はその文化の言語を使うことが重要で、善意で間違いを犯すことは避けなければならないこと、そして研究者は常に冷たい目で物事を吟味し、客観性を失ってはならないとも述べられた。

石井先生のお話に喚起され、出席者からは客観性と主観性の問題や多様性についてなど、多文化関係学の構築に重要なたくさんの意見が出されたが、今回は時間の限りがあり十分な議論はできなかった。

「多文化関係学を考える」という本研究会の主テーマを議論するには、あまりにも時間が足りず残念だったが、多文化関係学会の初代会長でいらっしゃる石井先生のお話をきっかけに、ホラロジーのエッセンスである Defensive にならない自由な議論を通して、多文化関係学とは何かを問い、多文化関係学会の使命を考える良いスタートになったと感じた研究会であった。

文責：井上美砂

関西地区研究会

日時：2008年3月7日（金）

場所：デイサービス・ハナマダン東九条



在日コリアン高齢者デイサービスへの

フィールドワーク：

デイサービス・ハナマダン東九条

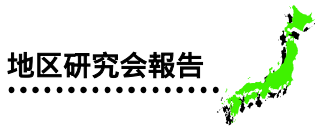
（NPO 法人京都コリアン生活センター・エルファ）訪問

『ハナマダン』はハングルで『一つの広場』を意味する言葉で、『エルファ』はうれしい時や楽しい時にでる感嘆符なのです。悲しい時にでる『アイゴ』の反対語です」と、理事長である鄭禧淳氏の説明からフィールドワークは始まった。京都コリアン生活センター・エルファは、異国で苦勞を重ねた同胞高齢者に穏やかな晩年を提供するために、「自分の生活史を持って生活できる場所」を京都の東九条 映画「パッチギ」の舞台となった地区 に設立された。1口500円の寄付を1400人（日本人も含めて）から集めた資金をもとにエレベーター付き2階建てのこぢんまりとしたバリアフリーの建物が、在日コリアン高齢者の方々が集まってくる広場となった。メンバーは曜日によって代わるが、毎日20数名が集まって、言葉に不自由を感じることなく、ハングルの歌やコリアン料理を満喫する数時間をここで過ごす。

金曜日にデイサービスに通ってこられる在日コリアン高齢者の方々と私達のためにリクリエーションを担当してくれたのは、コリア語と日本語ができるスタッフであった。ボールを投げ返しながら数を数えるゲームを全員で行った。「ハナ」「ニ」「スリー」と、コリア語、日本語、英語（異文化コミュニケーション学会会員のアメリカ人2名が参加したため）の3か国語を交えての交流は、在日コリアン高齢者の方々には少し複雑であったようであったが、笑顔と笑いは途切れることはなかった。2つのチームに分かれてボールを運ぶ競争では、負けたチームが「アリラン」を歌い、勝ったチームもその歌に合わせて踊った。最後には、自然に隣同士がお互いに手をつなぎあい、アリランの大合唱となった。「エルファは、このような時に自然に出てくる感嘆符なのだなー」と実感したのは、参加者の中でも私だけではなかったと思う。最後には、一人ひとり手を取り合いながら、「元気でね」「また会いましょう」と言葉を交わした。

「昔の苦しいことを忘れて、今日いっぱい楽しめて、明日目が開かなかったらいい」「エルファの歌で逝くから」という在日コリアン高齢者の方々言葉には、異国で老いを迎える人々のアイゴの気持ちが込められている。それだからこそ、「私達のことを知って欲しい」と、私達を含め多くの訪問者との交流を深めようとしているエルファの在日コリアン高齢者の方々の姿勢に、多文化関係学を学ぶ者として畏敬の念を覚えた。

文責：金本伊津子（桃山学院大学）



九州地区研究会

日時：2008年3月29日(土)

場所：九州大学六本松地区キャンパス



第1部：「海外で働く日本人日本語教師の文化的調整のプロセス 教育現場における異文化接触の事例を中心に」

話題提供者：古谷 真希氏

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程2年。日本語教育、異文化コミュニケーション)

本発表では、質問紙調査における事例をもとに、海外で働く日本人日本語教師と学習者との異文化接触上の問題点について議論されたが、それに先立ち、議論の中心となる文化的調整の概念が紹介された。文化的調整とは、異文化接触の際に問題となる概念である。従来は異文化適応という用語が用いられる場合が多いが、異文化適応には、個人の心の問題であり、自分の文化を捨てて相手の文化を受け入れれば解決される問題であるという含みがある。それに対し文化的調整は、相手とのやり取りを調整し、自文化と異文化との融合を目指すというものである。

文化的調整を行う際は、カルチャーショックと不確実性が問題となる。不確実性とは、異文化と接した際にどういう事態が起こるか分からないことで、目的に達するための手段や意図した行為から得るであろう結果を知らないことである。そして、カルチャーショックとは不確実な状態によって引き起こされるストレス反応である。これらを確認した後、海外で働く日本人日本語教師は、滞在国文化を取り入れつつも、日本人のサンプルとして自文化を保持し、学習者に提示する必要があるため、より複雑な調整過程を辿るのではないかという問題提起がなされ、3名の日本語教師から得られた事例が紹介された。

事例は、カルチャーショックの要因ごとに 教室内外のルールの違い、規範意識の違い 学習者の予想外の反応・態度 政治上の問題、の3つに分類され、学習者との具体的なやり取りに関する記述をもとに、文化的調整の過程が分析された。そこでは、学習者との共通意識を構築していくことの重要性や、教師の持つビリーフ(信念)が学習者との関係を阻害する要因となる可能性があることなどが指摘された。

発表後は、参加者による異文化接触の事例の紹介や、日本語教師に対する異文化間コミュニケーション教育への展開の可能性についての議論が行われ、日本の学校教育における教師-生徒間の問題にも示唆が与えられるのではないかと、言及された。

第2部：「日常会話」とは何か？ - 異文化コミュニケーションの視点から」

話題提供者：畠山 均氏(長崎純心大学人間心理学科。対人コミュニケーション、異文化コミュニケーション、英語教育)

本発表では、主に中学校における英語教育を題材に、「日常会話」とは何か、外国語の日常会話とは「ぐらい」や「程度」という表現をつけて言えるほど簡単なものなのか、という問題提起

のもと、異文化コミュニケーションの視点から「日常会話」についての再考が行われた。

まず、中学校での英語教育の位置付けとして、学習指導要領や教科書の内容などが紹介された。学習指導要領では「コミュニケーション能力」の育成が重視されており、英語で日常的な会話や簡単な情報の交換ができるような基礎的・実践的なコミュニケーション能力を養うという方針が示されているが、実際授業で使用されている教科書では構文的には難しい対話文が導入され、授業時間数と内容量・質のミスマッチから、場面ごとの決り文句を覚えるだけで単元が終わってしまうという点が指摘された。

次に、会話そのものについての説明がなされ、会話は 挨拶 日常交渉 日常会話、の3種類に分類されることが紹介された。 は言葉の意味よりそれを交わすことが重要であること、 は「郵便局での会話」「駅での会話」のように、はっきりとした目的と明確な始まりと終わりがあること、 は「友人とのおしゃべり」のように、目的がはっきりせず始まりと終わりが不明確であること、が確認された。この分類によると、一般的に市販されている英語の教材は「日常交渉」が主であることが分かる。

続いて、異文化コミュニケーションの視点から会話の3分類について説明がなされ、異文化接触をする際にもっとも誤解を引き起こす可能性が高いのは 日常会話であることが指摘された。日常会話では、文化の違いが大きく影響する。例として、話題の選択や、相手に対する質問の質・量、論理の筋道の立て方、あいづちをうつ場所・回数、沈黙に対する認識などが、文化により大きく異なると指摘された。

最後に、日常会話は日常交渉と異なり文化の影響が大きいことが再確認された。日常会話には人間関係なども関わってくる。そのため「日常会話ぐらいできれば」と言えるほど簡単なものではないにもかかわらず、現在の学習指導要領はその点を考慮していない。このことは今後の日本の英語教育に深刻な影響を及ぼすのではないかという指摘がなされた。

発表後は、活発な質疑応答が行われた。外国語の日常会話を習得することの難しさや、教師として日常交渉から日常会話に引き上げるためには何をしたらいいのか、などについて参加者自身の経験等を交えながら議論が展開された。

今回は、遠路はるばる北海道から駆けつけてくださった参加者もあり、終始なごやかなムードで研究会が進行していきました。参加人数は多くありませんでしたが、参加者の一人ひとりが十分に議論に参加することができたため、非常に充実した研究会であったように思います。

文責：古谷真希（九州大学）

地区研究会のご案内

2008年度 第1回北海道・東北地区研究会

藤女子大学キリスト教研究所 ジョイント研究会

日時：7月12日（土）15：00～17：30（懇親会は17：45～）

場所：藤女子大学 文学部16条キャンパス（458教室）



話題提供者 1：渡辺宗子氏（塾講師）

「津田梅子による女子高等教育開拓

新渡戸稲造と妻メリーとの接点に着目して」

話題提供者 2：柊 暁生氏（藤女子大学教授）

「『赦す』ということ（仮題）」

参加費：無料

連絡先：伊藤明美（藤女子大学）itoakemi@fujjoshi.ac.jp

研究会・懇親会の参加申込は7月9日（水）までにメールでお願いします。

2008年度 第1回関東地区研究会

ホラロジーの会ジョイントの集い

日時：7月26日（土）14：00～17：00

（懇親会を17時半より予定）

場所：青山学院大学 8号館4階コモンルーム

話題提供者：石黒武人氏（明海大学外国語学部英米語学科専任講師）

「多文化組織における日本人リーダーのコミュニケーション行動：

フォロワーに対するライフストーリー・インタビューを中心にして」

ホラロジーの会 話題提供者：岡部大祐氏（青山学院大学大学院国際政治経済学研究科・国際コミュニケーション専攻博士後期課程 / 同大学総合研究所特別研究員）

「多元化する医療と多文化化する医療：医療におけるコミュニケーション問題の批判的再考」

参加費：無料

連絡先：手塚千鶴子（慶応義塾大学）ctezuka@ic.keio.ac.jp

申し込みの締め切りは7月23日です。

2008年度 第1回中部・関西地区研究会

日時：7月5日（土）14：00～17：00

場所：関西学院大学大阪梅田キャンパス

研究会テーマ：異文化における日本人のコミュニケーション行動を探る

話題提供者 1：柳本麻美氏（桃山学院大学）

「オーストラリア・カウラ捕虜収容所日本兵脱走事件：日本人のコミュニケーション特性からの考察（仮題）」

話題提供者 2：中川慎二氏（関西学院大学）

「デュッセルドルフの日本人社会の調査をはじめて」

参加費：無料

連絡先：金本伊津子（桃山学院大学）kanakana@andrew.ac.jp

2008年度 第1回九州地区研究会

日時：9月13日(土) 14:00~17:00

場所：九州大学六本松地区キャンパス本館2階第3会議室(予定)

話題提供者1: 曹 美庚 (CHO Mikyung) 氏 (九州大学大学院言語文化研究院)

「個人経験とスキップ許容度」(仮題)

話題提供者2: 高松 里氏 (九州大学留学生センター)

* テーマは未定。

参加費：無料。学会員以外の方も参加をお待ちしております。研究会終了後、懇親会も予定しています(場所：引き続き同会議室にて。参加費 ¥1,000 程度)

連絡先：松永典子 (九州大学) mnori@scs.kyushu-u.ac.jp (092-726-4720) 研究会・懇親会の参加申し込みは、前日までにメールか電話でお願いします。

書 評



『サムライ異文化交渉史』

御手洗 昭治著

(ゆまに書房 2007年)

世界の中での日本の役割が問われている現在、ますます的確な異文化間のコミュニケーション能力、交渉力が求められている。本書は膨大な歴史資料を紐解きながら、鎖国日本をめぐる欧米各国の“異文化交渉戦略”を「交渉学」の視点から分析し、歴史から多くを学ぶことが出来る貴重な著書である。

著者の御手洗氏が指摘するように、これまでの異文化交流や交渉史の研究には、国際交渉学、政治学を含む社会科学の理論と歴史学を合わせた、いわゆる学際的アプローチによる文献が少ない。また異文化コミュニケーションの分野で、歴史資料を解読し、それを交渉やコミュニケーションの視点から分析したものも少ない。本書では「異文化交渉史」を、「国家同士が接触・交流し相互に影響しあった戦略的なプロセスをコミュニケーションの視点から取り扱った歴史」とし、様々な交渉が緻密に分析されている。

本書を読み始めると、膨大な文書・資料の数に圧倒されるが、ペリー以前の日米交渉、北のシルクロード山丹交易、ロシアの「露米会社」と日露関係、そして開国に至った交渉など、其々の交渉展開以前からの歴史的背景と、交渉に当たった人物、その経過が丹念に描かれた上に、各文化による「交渉」「交易」「交流」そして「戦略」の捉え方の相違が、ロシア・欧米、中国、日本間で比較・分析されている。「その時代、人々の意識や世界像とは如何なるものであったのか」「日本は外圧に対しどのように対応しようとしたのであろうか?」「欧米列強は通商を含む「交渉」をどうとらえ、異文化の日本に対しどのような戦略で交渉・交流を推し進め接近しようとしたのであろうか」等、異文化間交渉とその背景がマクロとミクロの視点から分析が行われている。

御手洗氏は、異文化戦略交渉において注意すべき点は、交渉者同士が互いに相手に対して取る

書評

態度であり、その態度が交渉の結果を大きく作用すると指摘し、異文化戦略交渉における初期の行動を5種類の型と6つの構成要素に分類し、この組み合わせを基に、黒船来航前後の異文化交渉に当たった人物を、双方からの書簡を含めた歴史資料をもとに丁寧に分析している。例えば、鎖国体制下で日本の資料を収集し欧米諸国に対して貴重な情報を提供した、互惠型戦略交渉の達人ケンペル、日本の排他主義に対しては排他主義を持って交渉に臨んだペリー、また筆談外交や、影の立役者であるミディエーターや通訳の役割も分析され、更には言葉を交わしての交渉だけでなく、「食を共に」した食卓外交も、異文化間の戦略的コミュニケーションの視点から分析されているのが興味深い。

御手洗氏が指摘するように、国際問題や異文化間の紛争問題を解く糸口やカギは、「過去」の中にもあるといえるかもしれない。本書は、異文化間の交渉や戦略をコミュニケーションの視点から捉え直した貴重な書物であると共に、コミュニケーションの視点から歴史を読み直すにも非常に有意義な書物であると思われる。

文責：大谷みどり（島根大学）

理事会議事録（抄録）



2007年度第3回多文化関係学会理事会議事録

日時：2008年3月16日（日）青山学院大学

出席者：石井（敏） 磯崎 抱井 金本 久保田 久米 河野 小松 田崎 手塚 灘光 林 松田

【報告事項】

1. 前回議事録確認
2. 事務局から07年度会計報告があった。学会誌の丸善との委託販売に関する契約は、近日中に完了する。
3. 学会誌第4号は、3月中に印刷・送付を完了する。
4. ニュースレター12号は2月に送付完了した。
5. 関東地区、関西地区、九州地区における研究会の報告があった。
6. 会員名簿がニュースレター12号と共に郵送された。
7. 李明玉会員が2007年12月に北海道大学より懲戒免職相当の処置を受けたことに鑑み、多文化関係学会会則第5条の規定に照らし、理事会は2008年1月31日付けで同会員に退会を求めことに決定した。

【審議事項】

1. 学会の企画として、6月を目途に明石書店へ提出する出版の企画書を作成する。担当は、企画委員会（灘光・清・抱井理事）と林顧問と田崎理事。

2. 2008 年度役員

- ・ 学会誌編集委員長を田崎理事、副委員長を青木理事、委員を原氏、石黒氏に委嘱した。
- ・ ニュースレター委員を大谷氏に委嘱した。
- ・ 元北海道大学准教授李明玉氏の論文盗用に関する検討委員会委員を、伊藤理事、御手洗氏、岡村氏に委嘱した。
- ・ 2008 年度選挙管理委員会委員長を河野理事、委員を抱井理事、磯崎理事に委嘱した。
- ・ 財務委員会委員長を小松理事、委員を松田理事に委嘱した。
- ・ 中部地区を関西地区に含め、関西・中部地区研究会委員長を金本理事に委嘱した。
- ・ 文書管理委員長を磯崎理事に委嘱した。

3. 学会誌の文字数制限を以下のように変更することが承認された。

	旧	新
論文	日 12000 字	日 20000 字
	英 6000 語	英 10000 語
研究ノート	日 8000 字	日 12000 字
	英 4000 語	英 6000 語

4. 北海道大学の調査で盗用論文と認められた李明玉氏の論文が、本学会誌の 2、3 号に掲載されていた論文、研究ノートに同氏により引用されていたため、学会誌を発送する際に、その旨を記載した文書を差し込むことが承認された。

5. 2008 年度第 7 回年次大会について

- ・ 主テーマ：「多文化関係学の構築をめざして」
- ・ 副テーマ：「ミクロとマクロからグローバル社会を考える」
- ・ パネルディスカッション：「移民国家（仮）」
- ・ オープンフォーラム：「多文化関係学を考える（仮）」
- ・ プレワークショップカンファレンス：内容はテキストマイニング
- ・ 研究発表：大会委員会がテーマを設定して募る特別セッションとポスターセッションの部門を新たに加える。

6. 2003～2007 年の会費未納者リストをもとに会費納入の方法が検討された。07 年度未納者には学会誌第 4 号が送付されないため、その旨、メールで会員に伝達する。

以上

事務局より

1. 「学会員名と会員番号リスト」の利用方法

前回のニュースレター（第 12 号）に同封しました「会員名と会員番号リスト」の利用方法は、(1) 会員ご自身が「学会ホームページ」から、会員情報に入り、ご自分の必要なデータ変更を行うこと、(2) 会員各自が会費納入状況をホームページからご確認いただくことです。

2. 「学会費納入方法」

- (1) 学会ホームページで納入状況を確認する（上記） (2) 郵便局の振込用紙で会費を

事務局より

納入する。(その際、会員番号、氏名、住所、会費年度を明記する)(多文化関係学会の口座番号は「00120-2-536126」です。)

3. 「学会ホームページ」の「学会員専用サイト」の利用方法

<http://www.js-mr.org/> 学会ホームページ 学会員専用サイト 学会員ログイン(会員番号、パスワード) 学会員サイトメニュー : (1) ディスカッションボード、(2) 会員情報検索、(3) 登録情報更新

4. 「新刊学会誌(ジャーナル)」の配布方法

学会誌は、毎年3月頃学会員の皆様に配布しますが、自動的に配布するのは学会費支払い済み会員(当該年度)のみが対象となります。したがって、3月末以降に学会費をお支払いいただいた方には、事務局から個別に「新刊学会誌」を郵送しています。なお学会誌の会員価格は2000円です。

5. 会員の皆様へ! 大学図書館への「学会誌」紹介のお願い!

本学会は昨年9月に日本学術会議の「協力学術研究団体」として認可され、その称号を受けました。したがって、学会誌の投稿論文も公的に認められ、さまざまな形で学術的な引用頻度が高くなってきました。この為、学会の財政基盤の一助となる、「全国の大学図書館への紹介と販売プロジェクト」にぜひご協力とお力を下さい。なお大学図書館などへの販売価格は、3,150円で、連絡先は以下のとおりです。

連絡先: 担当者(古賀哲夫)

担当部署: 丸善株式会社、国内仕入部(ブックネットS.C.)

住所: 〒103-8244 東京都中央区日本橋3-9-2

電話番号: 03-3273-1042 Fax: 03-3273-1043

E-mail: t_koga@maruzen.co.jp

お知らせ 学会情報



日本コミュニケーション学会
第38回年次大会
7/5~7/6 名古屋大学

異文化コミュニケーション学会
第23回年次大会
11/8~11/9 信州大学

日本心理学会
第72回年次大会
9/19~9/21 北海道大学

日本交渉学会
第21回年次大会
11/15~11/16 立命館大学(朱雀校舎)

SIETAR World Congress 2008 (SIETAR グローバルの2008年世界大会)
10/22~10/26 スペイン(グラナダ)

編集部より

ニュースレターに関する会員の皆さまのご意見・ご感想をお寄せ下さい。お待ちしております。また、今号の編集から島根大学の**大谷みどりさん**がお手伝い下さることになりましたので、お知らせいたします。長い間、編集作業に関わってこられた**徳井厚子さん**、本当にお疲れ様でした。これまでのご協力に心からの感謝を申し上げます。(NL編集委員会)